JUDI News

都市環境デザイン会議
Japan Urban Design Institute

発行者：都市環境デザイン会議事務局
150　東京都渋谷区広尾1-10-4 越山LKビル内
TEL.03-5420-5995 FAX.03-5420-5996

2
1991.10.20

INDEX

■活動を開始したJUDI――1
■関西での動き――1
■地方ブロックから――2～6
■特集：六甲アイランドの環境デザイン－7～10
■ロゴ決まる――11
■関東ブロック例会案内――11
■代表幹事会から――12
■事業委員会から――12
■事務局だより――12

活動を開始したJUDI

5月に本会議を発足させてから5か月たった。スタートにあたって事務的処理（とくに入会申込手続きや名簿の発行）に若干の手違いはあったものの一応順調な立上がりではないかと思っている。早速、各方面から様々な問い合わせがあり、またブロック別の例会活動が開始された。

各方面からの問合わせのうち2、3を紹介すると（財）パブリックデザインセンターからの講師派遣依頼や、ある地方の青年会議所からの自主事業に対するアドバイス要請などがあり、また、地方自治体からの問合わせ等がある。これらについては事業委員会と代表幹事で対応している。また、本ニュースレターの編集、あるいは本会議の案内パンフ等の作成等について広報委員会が精力的に活動している。これら活動については、本ニュースレターに報告として載せているのでお読みいただきたい。

ところで、本会議の日常的活動で重要と考えているのは、各ブロックごとの例会活動と本ニュースレターによる情報発信および意見交換である。例会は、すでに東京で2回、関西で3回、中部で2回開かれた。その内容については、次回以降のニュースレターで皆さんにお届けする予定である。これまでの例会をみるかぎり、さまざまな分野、関心の持ち様、都市環境デザインに関する知識や経験の差などを抱えつつ例会運営をしていくには多少の工夫が要りそうである。もう少しの積み重ねを行い、方針を固めていきたいが、さまざまな人々によって構成されているという本会議の特徴を生かすことを心がけたい。また、会員分布が地方によって偏っていることから例会運営が困難なブロックもありそうである。会員の発掘も含めて今後の課題としたい。

以上も踏まえて、ニュースレターによる参加を活撥化しなくてはならないだろう。本ニュースレター第2号はそのような意図も含めて紙面構成をとっているが、今後個々の会員からの情報提供、寄稿等を大いに期待するところである。

【土田　旭】

関西での動き

都市環境デザイン会議が発足して5か月、その間関西ブロックでは今後の会の運営方法をめぐって数回の運営委員会を開催、具体策を検討してきました。先ずは設立総会で承認された「私達の仕事の発表会－都市環境デザインフォーラム」の開催に向けて準備を進めています。（地方ブロック便り参照）。

それにしても現在の関西ブロックの入会者は30人。設立総会の参加者だけでも48名ですから、まだ入会手続きを済ましていない人が相当数いることになります。年内には全ての方に手続きを済ませて頂くよう連絡を密にする必要があります。

なお、今回のJUDI－2号は関西が中心になって編集しました。関西のビッグプロジェクト紹介4頁を特集しました。楽しんで頂けますでしょうか。

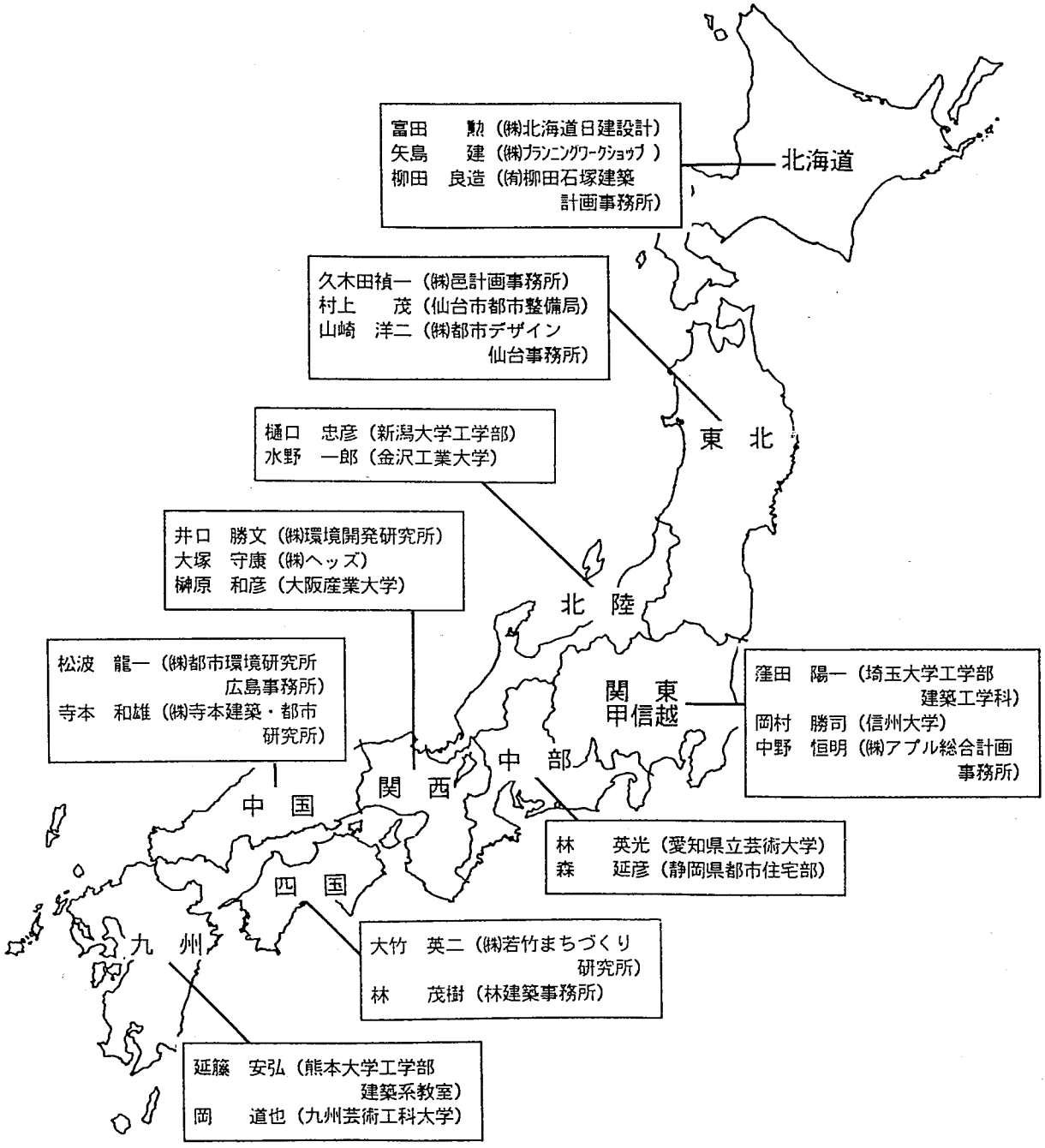
【井口勝文】

地方ブロックから

ＪＵＤＩもいよいよ本格的な活動を開始いたしました。活動の中心となるブロック幹事も地図のように決まり、全国組織としての体制もできあがりました。そこで、せっかくのネットワークが東京、大阪中心にならないように、ＪＵＤＩでは大都市と地方都市相互のキャッチボールによる情報交換を目指すことにしました。そして、活動の実態は各地方ブロック幹事を中心に広げていきたいと考えています。

このような主旨から、今回は全国９ブロックのすべてからブロック幹事の方々に登場していただき、それぞれの活動方針や問題点などをお知らせ願うことに致しました。

＜ブロック別幹事一覧＞



北海道ブロック

函館や松前、江差など古くからのまちを除けば、道内２１２市町村の市街地のほとんどは明治以降に形成されている。今や北海道の人口規模はスイス一国に匹敵し、過去１世紀は都市の新開発が主流であったのは当然といえる。その後の四半世紀は、全体としての人口は増加の途を辿りつつも、向都離村、産炭都市の衰退、港湾都市の斜陽などがあって、個々には新開発に加えて再開発、そして保存・再生の都市環境デザインが論議されてきている。

百万都市の仲間入りをして四半世紀近くになる札幌は、全国５番目の大都市となり、近隣都市も含めて拡大の傾向は続いており、新開発系の都市環境デザインの場が多いといえる。一方では、人口減少に悩む都市が多く、中でも産炭都市のディクライニングには劇的なものがあり、縮小していく都市の環境デザインとしての対応にも厳しいものがある。

エネルギーや産業構造、流通機能の変化の直撃を受けた産炭都市や鉄鋼のまち、そして港湾都市では、産業経済の再活性に向けて都市設備の更新などが当然のこととして進められてきた。その際、新しい産業経済の動きと既存の物的な都市環境とのコンフリクトが起きている。一つの例として、小樽がある。港湾荷役設備の近代化の過程で、交通体系の再編とも絡んで、小樽運河と石造倉庫群の保存運動が展開された。石炭の積み出し港、穀物の輸出港として日本でも早くに敷かれた鉄道を持つ小樽が、駅前の法定再開発や運河沿いの石造倉庫群の再利用を国内でも早くに行って、都市環境の保存・再生に係わるデザインの実践の場を提供している。

ここ１０年程度についてみると、「北のまちづくり」を標榜して、北方型街区や北国住宅地、あるいは歴史を生かすまちづくりなど、行政としての取り組みがみられる。また、北海道都市景観ガイドラインや景観アドバイザー派遣制度、北海道屋外広告物条例など、視覚的側面からの都市環境デザインへのアプローチがなされ始めている。官・民による住宅地、商店街あるいは工業地の開発・整備では景観への配慮も相当なされるようになり、私的領域の視覚的公共性が認識されてきている。また、道内の各種デザイン界を網羅した民間の団体として北海道デザイン協議会があり、彫刻やクラフトなどの分野からも都市環境のデザインに係わりを深めている。

スイスの国土面積の2 倍もあり32市 180町村を擁する北海道にあっては、都市計画をもたない農山漁村中心市街地の環境整備や、一年のうち７カ月は暖房のお世話になる積雪寒冷の地域性を反映して、常に夏と冬の両面から都市環境のデザインを考えていく状況が定着しつつある。また、都市環境整備に技術的に関わる建築、土木あるいは造園の分野などについてみても、このような北海道の地域性から、専門領域の明確な分化は難しく、むしろ都市環境デザインにとって必要な総合化を、巧まずして行なっているのかもしれない。

【矢島　建】

東北ブロック

いま何かと東北地方の動きが活発になっている。バブルは弾けたと言われながらも仙台を中心とした東北への経済投資はまだまだこれからも続きそうである。都市環境デザインという視点でみても、東北の環境整備はこれまで遅れてきたといえるが今後は公共、民間ともに活発に進められるであろうし、新しい都市環境づくりへの期待は高まっている。

仙台市は政令市として全国に再デビューすることになり、東北新幹線は東京駅に直接乗入れが始まった。大きな流れとしてはますますグローバル化し、東北にも近代的な都市的風景が急速に広がっていくであろう。

こんな中で唐突だが、先日ちょっと気になる話があった。仙台にある某大学の建築学生のことだが、建築や都市環境に興味や問題意識をもち、自分なりに考えた提案をある設計課題にぶつけ、自分の力を試そうとしたところ、その批評会では意図に反して先生方は細かい技術的な注文をつけることに終始し、彼が期待した地域の読み取りやデザイン批評などのキャッチボールが行われる雰囲気さえなくがっかりさせられたらしいのである。やり場のない悔しさを抱えて彼は私のところへやってきて、もう一度実際に建築活動や街づくりの活動をやっている人達を呼んで批評会を開きたい、その時は来てもらえないかと言うのである。

学生とは最も感受性が豊かな時代であって、時代の流れに最も敏感である。その時に学んだり、論議したり、考え方の異なる様々の批評に出会ったりすることによって、新しい空間やデザインを発想するはずである。若い問題意識をつみとるようなこの状況に残念な思いがした訳である。

どの大学でも大なり小なり似た状況にはあると思えるが、東北ではもともと建築や都市環境に対する時代批評が余り盛んとは言えない。また学生の動きも街の中にいても余り見えてこない。東北地方が東京や京阪神と決定的に異なるのはこのあたりではないのだろうか。私は地域差というものを考えざるを得なかった。

余りにも動かし難い現実の前で今は若者が目を塞ぎがちのように言われているがしかし、実際には社会そのものが拒否してしまっているのではないか東北という土地柄がそのことをさらに助長しているとは思いたくないのであるが……。

東北の都市環境は自然に頼っている側面がとりわけ強い。都市開発が活発になるに連れ、グローバルなデザインが見本市のように展開されていくであろう。東北の街がどのような環境づくりを目指していくのか、しっかりしたコンセプトを持たなければならないと思うが、先に述べたような状況では心許ない。

東北では特に若者達も含めた都市環境デザインへの議論が広がっていくような場がこの会議で提供されればさらに意義が深まりそうである。

【山崎洋二】

北陸ブロック

JUDI北陸ブロックとしては何の動きもしていませんので、北陸での都市環境デザインに関係すると思われる動きについて紹介します。もう一人のブロック幹事である水野先生と調整が取れませんでしたので、小生が関係したかぎりでの動きについてのみ記します。

一つは、建築学会北陸支部大会にかかわる動きです。平成2年の新潟大会から、研究発表会のなかに集中討議の時間帯が部門ごとに設けられるようになり、計画・歴史部門では、「北陸地域の都市景観計画」というテーマで集中討議が行われました。

レポーターは、岡村勝司先生（信州大学）、玉置伸吾先生（福井大学）、川上光彦先生（金沢大学）で、司会は小生でした。建築系の先生が、それぞれ地元地域の都市景観計画にかなり深く関わっていることが明らかになり、限られた時間でしたが、なかなか有意義な情報交換を行うことができました。

今年の建築学会北陸支部大会（福井）でも、玉置伸吾先生司会で「景観形成のための方法論」というテーマで、関連する発表論文をネタにして集中討議が行われました。短時間の枠内でしたが、多様な意見がでて、活発な論議がなされました。

学会の大会は行事が立て込んでいて、なかなかゆったりした時間枠が取れません。学会員ばかりでなく、実務に係わる人たちも、じっくり時間をかけて情報交換や意見交換を行える。そのような場を用意する上で、デザイン会議の地域ブロックは大きな役割りをはたすことができるのかもしれません。

最後に、地元新潟の情報を一つ。新潟の景観行政は遅れを取っていますが、リゾート法の重点地域に位置する安塚町は、県内初の景観条例を今年の10月1日から施行することになりました。実効性のあるものにということで、町役場の窓口を充実して、きめの細かい専門的な指導を行えるようにしているようで、成果を期待しています。

【樋口忠彦】

関東甲信越ブロック

関東というとどうしても東京中心のイメージが強いが、都市環境デザインの普及を考えると、関東ブロックとしてはむしろ周辺県で活動を展開する方が好ましいのではないかという気がする。

ただ、既にいくつかの県では、地元で居住し活動しているデザイナーの人達が独自に組織化を図りつつある。例えば埼玉デザイン協議会等、その形態や規模はさまざまであり、成り立ちの経緯も異なるし都市環境デザイン会議に参加している人々もいればそうではない人達もいる。

私達都市環境デザイン会議の関東ブロックのメンバーがそれらを横断的に結び付けられれば理想的ではあるが、今の体力を考えると、かなり長期的なスタンスをとって着実に実績を重ねることが、まずは信頼の獲得という面で大切なことではないだろうか

当面は、任意に、また不定期で良いから、東京の周辺県の都市環境デザインの実態を眺めて回りながら「ああでもない、こうでもない」「いや、ああだこうだ」と好き勝手に論評し合うような、アーバン・ハイキング（キャンプでも良い）を考えてみてはどうだろうかと思っている。その時に、非会員の参加を歓迎することが大切だろう。地元で活動しているグループとの交流ができればなお良いし、学生や一般の人々も呼び込めればいっそう面白い。参加人数等にはこだわらずに都市環境デザインを楽しく肴にしてしまおう。

その様子を逐次会報に掲載することにより、都市環境デザイン批評の枠組みが見えてきはしないだろうか。80年代に使い尽くされて手垢の着いてしまった方法論に総括を加えてみよう。

と力んでみたが、今や都市環境デザイナーは人手不足で大忙しの時期にある。それがそれで結構なことではあるが、時間に追われていてはじっくり考える暇もできない。だからこそ積極的に時間をつくる意味があるのだ。できれば、各地にサロン的な拠点があると良いのだけれども、生まれたばかりの組織にそんなぜいたくはできない。

あまり大がかりなことからではなく、地域社会と都市環境デザインの方法の関係について気楽に語り合う場を設営したいと思う。比較的交通の便がよい所から手始めに、まずは関東の都市環境デザインマップを作るつもりでスタートしたい。

【窪田陽一】

中部ブロック

8月24日中部ブロックの初例会を静岡県の浜松市で開催しました。ここ10数年来目覚ましい勢いで都市改造を進め、特に都心の都市景観形成に取り組んでいるＪＲ駅前地区の「フォルテ」というコンベンション施設に19名の多様な分野の方々が集りました。

初回でもあり、始めに自己紹介と都市環境デザイン会議への期待などをテーマにショートスピーチをお願いし、総じて、人的な交流や情報交換、異分野の勉学の機会としたいなどという発言が多く出されました。

次は、事例紹介ということで、都市景観行政に積極的に取り組んでいる浜松市と静岡市のガイドプランや条例、実践談などについて発表があった。この種の情報交換は、今後ともブロックレベルで積極的に行っていった方が良いのではないかと思われます。様々な分野の専門家の集まりであるだけに、それぞれの立場で有益だと考えます。

次のテーマは、会員の拡充についてでした。事務局から送られたリストでは20数名、そのうち約半数の方だけが入会済みであり、かつ愛知県と静岡県の方だけという状況でした。このため愛知県、静岡県は無論、三重県や岐阜県も含めて会員の拡充に取り組むこととしました。

最後は、中部ブロックの今後の活動についてでしたが、開かれた活動としたいという意見、そして、早速10月頃の活動の具体案の提案が、林英光幹事からありました。

都市環境デザインの重要性が声高に叫ばれており、

都市環境デザイン会議そのものも大変機をえて発足しました。本来的には当り前のこととして、とらえるべきことですが、残念ながらそうではありませんので、今は、多分に啓発の段階だと思われます。いわば、今まで先駆的に取り組んでいただいた人達の地道な研究や活動が、ようやく認知され始めたとも言えるのではないでしょうか。それだけに、これからは積極的な実践の段階に向け、ブロックの活動も大いに展開したいと思います。

L．ハルプリンを訪ねたおり、「ランドスケープアーキテクトは、我々の文化、社会のこだまのように動いていくのだ」という話しを伺ったことがあります。まさに社会的ニーズに応えるうえでも、現在のような流れが、ゆめ、一過性の流行に終わることのないよう、都市環境デザイン会議（ＪＵＤＩ）の今後の役割は大きいものがあると考えます。

【森　延彦】

関西ブロック

関西ブロックの活動報告をさせていただく。第１回関西例会を 7月22日（月）に行った。懇親会を兼ねており、出席者は46名と盛況であった（とはいえ、９月現在の関西ブロック会員登録者数は30名でしかなく、対策を考えている）。会議では、全員の自己紹介の後、関西ブロック運営委員を選出した。鳴海（代表幹事）、井口、大塚、榊原（以上幹事）の他に、江川直樹（現代計画）、加藤春樹（神戸市）、菅家克子（菅家建築設計室）、小林郁雄（コープラン）、後藤祐介（ジーユー計画）、千葉桂司（住都公団）、辻井道弘（大林組）、土橋正彦（アーバンスタディ）、北条蓮英（アーバンプランニング）、宮前保子（スペースビジョン）、山崎正史（京都大学）、吉田薫（ＣＯＭ）の各氏である。

次に活動方針の検討を行った。これまでに２回開かれた関西ブロック準備会会合での意見を踏まえて、作品や計画の発表、意見・情報交換のためのイベント（１頁で紹介された「都市環境デザインフォーラム」）を年１回定期的に開催することを決めた。会員間あるいは関連分野の専門家間の情報交換、学生や一般市民の啓発、行政等への提案が可能となり、都市環境デザインについての論議の深化、職能・社会的地位の確立につながっていこう。すでに、この「JUDI News 」を本部と地方で１号毎に交替で編集することが決まっているので、これと併せ、関西から全国の会員に情報発信することになる。

８月27日には、第１回関西ブロック運営委員会を開催した。運営委員長として井口氏を選出した後、８月10日開催の代表幹事会の報告があったが、特に地方ブロック会計のあり方について意見のやりとりがあった。今後の検討を要するところである。主な議題は「フォーラム」で、第１回を92年の４月に３日間にわたって開催するなど、実施細目を検討した。

ところで、９月４日の各新聞紙上で、西尾大阪市長が御堂筋の土佐堀通から本町通までの980㍍区間の「百尺制限」見直しを検討する方針であることが報道された。筆者は、率直・端的に言えば、反対である。制限制定後約70年、昭和８年の地下鉄梅田－心斎橋間開通、ガスビル竣工から数えても58年余を費やしてつくりあげられ、守られてきた御堂筋の景観的価値は貴重である。何と引換にするにしても、簡単に手放してしまってはいけない。問題があることは承知しているが、他の手段で解決可能ではないのか。総延長 4.5㌔の内の１㌔程をこのままにしておいて何故いけないのか。いずれにせよ、筆者の意見は意見として、環境デザイン会議として論議し、世に対して発言すべきであろう。会議の存在意義にも関わってくる問題であると思えるが。

【榊原和彦】

中国ブロック

広島周辺の景観行政を巡る話題について断片的に紹介したい。

広島市では、すでに10数年来「都市美」政策が展開されてきた。10周年にあたって記念誌も刊行されたので、ご覧になった方も多いだろう。その政策を一言でいえば、都市美協議という「お願い」による、建築景観の「底上げ」方式を中心としたものだ。美観に配慮する姿勢を施主や設計者へ浸透させるという意味で、それなりに大きな効果をあげてきた。条例も要綱も、いわゆるマスタープランも（従って、明示的なゾーニングも）もたない景観誘導の推進例として、特筆に値するものといえる。今後の展開については、建築単体に対する底上げ型の誘導というレベルを越えるために、いくつかの課題が指摘されている。まず、1994年に広島市で開催されるアジア競技大会を控えて、地区ワイドでの開発、再開発の動きが活発に起きてきているが、これまで、必ずしも充分な経験を積んではいない。群としてのアーバンデザインが正念場を迎えることになる。また、これまでの実績を踏まえて、縦割りの弊害を廃した境界デザインが必要であるとの意識も、市民の中に広がってきている。その意味も含めて、今後は強力な調整能力が求められるところだ。先頃、市、県、建設省の３者協同で「水の都調整構想」が策定されたが、その運用が、新しい景観行政の行方を占うものとして期待されている。

一方、広島県では、今年３月に「ふるさと広島の景観の保全と創造に関する条例」が交付され、県レベルでの景観行政への取り組みが本格的に始まった。これは、自然地域、とくにリゾート地域に主たるターゲットを置いたものだ。現在、施行に向けて民間行為、公共事業に対する景観マニュアルと、市町村の景観行政に対する指針づくりの作業などが行われている。マニュアル化に際して、県域の地域区分と地域別指針とが論議の俎上に上っている。いくつかの地区では、個別の指針づくりも始まった。県レベルで景観を扱うことの難しさ、県、市町村、地元の役割分担のありかたに、解答が欲しいところだ。

【松波龍一】

四国ブロック

経済活動の絶対的ボリウムの少ない地方都市において、必然的に予算の少ない地方自治体の行う都市基盤整備の遅れは致しかた無いことであり、なかなか景観とかアメニティーにまで手が廻らないのが実状であります。市制を敷いた１００年前には国内10指に入る大都市だったここ徳島市も、現在の人口が２６万と当時とあまり変わらず今ではごくありふれた地方小都市であり、御多分に漏れず環境整備も遅れていました。しかし、数年前から少しずつではありますが都市環境への投資も行われて来ています。

市内中心部を流れる新町川左岸は、３年の月日と11億円の費用を投じて一昨年水際公園として生まれかわり、市民の憩いの場として、また各種イベント会場として親しまれています。かつて両岸に建ち並ぶ藍倉を川面に写し美しい風景を呈していた新町川も、戦災で町が焼けた後は無秩序に建った建物が川に背中を向けていただけに水辺を人々が取り戻した意義は大きいでしょう。

中心市街地の特色ある５地区を選定して、毎年１地区都市景観形成基準を策定していく事業も本年は最終の５年目を迎えています。最初市の建築指導課が担当していた当事業も、昨年からは景観課が新設され専従の職員が配備されて公共建物のデザインマニュアルの製作、８年目を迎えるＪＣ、建築士会と共催の魅力あるまちづくりシンポジウムの開催などと共に担当しており、今後に期待されております。

徳島市においてはこのように体制も整い少しづつではあるが都市環境の整備は行われていますが、他の市町村に於いてはまだまだ生活するための施設づくりに追われているのが現状であります。一番深刻なのが過疎化で、いろいろな村おこし運動も人口の減少を食い止めるのが大きな目的の一つといえ、環境デザインまで意識が届いていないのが実状でありここ徳島だけでなく四国に於いては、このような自然には恵まれているが過疎化に悩む（都市でない）町村がほとんどであり、これらの環境デザインをどの様に構築するかが大きな課題と言えるでしょう。

気が付けば四国ブロックの幹事をお引受することとなっていましたが、私自身四国全体の状況を把握しているわけでもなく、どの様な活動をすれば良いのやら、また各地との情報ネットワークはどうされるのか、会員諸氏の研究成果をデータベースとして公開していただけるのか、お教えいただきたいことは山ほどあります。しかし、ネタの少ない四国でも高知の大谷君とできるだけ情報発信はしていこうと思っております。今後とも宜しくお願い致します。

【林　茂樹】

九州ブロック

九州においても〈都市環境デザイン〉の重要性に対する認識は深まりつつある。とりわけ公共事業等への取り組みには大きな変化が出始めている。従来の「規格通り」の整備方法を乗り越えようと、デザイン面にも十分配慮した形での、新しい事業推進の「仕組みづくり」が進んでいるのは喜ばしい傾向であろう。ただ、具体的なデザインの「質」の問題となると、まだまだの段階で、検討すべき課題が多く残されているといえる。

例えば、〈環境デザイン〉ということで、必要以上に身構えてしまうせいか、やたらと派手な造形が目立つ。それらが地域の特性とうまく結びつかず、何ともいえない違和感がつきまとうことも多い。早い話が、〈環境デザイン〉といえば、今、大都市を中心に流行している、トレンディで、おしゃれな雰囲気づくりといった、安易な受取り方も少なくないようだ。

一方、「地域の個性」への関心も高まってきている。その事自体、重要な意味を含んでいると思うのではあるが、具体的なデザインでは、今ひとつ説得力にかける。「～らしさ」を強調するのはよいが、表面的な模倣の域を出ない陳腐な造形に出会って、戸惑うこともしばしばある。「似て非なる」デザインの氾濫からは、未来に向けての環境造形のエネルギーが生まれてこないのではと危惧される。

いずれにしても、環境の質的側面に肉薄するような、本格的な〈都市環境デザイン〉の展開は、残念ながら九州では、はなはだ心もとない段階にとどまっていると認めざるを得ない。

このような観点から、九州各地の都市環境の実態を眺めてみる時、特に人口５～６万人程度の中小都市の動向に注目すべきではないかというのが、私の持論である。これらの都市の中には、長い間、地域の中心的役割りを担い、それ故に優れた歴史的環境資産を抱え込んでいるものが多い。

ところが近年の経済社会の変動に伴い、これらの都市は軒並み、経済的また文化的活力の面でじり貧の状態に追い込まれている。それに伴い貴重な環境資産が消滅しつつある。歴史的環境の保全と経済的活性化との間で悩んでいるこれらの都市をみるにつけ、総合的な〈都市環境デザイン〉の重要性と、現実面での対応の難しさを、改めて痛感させられる。

規模は小さくとも、豊かな総合性を獲得した、原理的にしっかりした整備手法の確立と、それと有機的に連動した魅力ある〈都市環境デザイン〉の実践が、地方中小都市では特に強く求められている。当会議での主要な研究テーマの一つに、ぜひ加えておいて欲しいものである。

なお、このような方向で〈都市環境デザイン〉を実践していく際、特に欲しい情報は、各地で取り組まれている類似の事例に関する詳しい内容である。結論として整理されたものもさることながら、具体的なデザインの過程での、悪戦苦闘の跡が読み取れるナマナマしい記録が、実は最も欲しい内容なのである。そのような情報交換の場として、当会議が大きな役割を担ってくれることを強く望みたい。

【岡　道也】

特集・六甲アイランドの環境デザイン

事業の仕掛人の立場から――加藤春樹(神戸市)

(1) 六甲アイランドの概要

六甲アイランドは、神戸市灘区の沖合いに神戸市が昭和47年度から建設中の人工島である。大阪ベイエリアの内阪神都市圏の中心に立地し、関西国際空港まで直線距離約30km足らずの恵まれた地理的条件を有している。

建設の目的は、(ｱ)船舶の大型化、物流システムの多様化に対応する近代的港湾施設、(ｲ)高度情報化、国際化に対応した住宅・業務・商業・教育・レクリエーション機能を備えた多機能型複合都市の建設により、神戸の国際情報都市化を推進することである。

グランドデザインは、外周部を港湾機能ゾーンとして、関西国際空港への貨物基地となるＫ－ＡＣＴ（エアーカーゴ・シティ・ターミナル）をはじめ、41の埠頭や港湾関連用地を配し、その内側に産業基盤・都市再開発用地を配している。更に緩衝緑地（シティヒル）で隔てられた中心部を都市機能ゾーンとして計画している。

- 埋立面積　580ha
- 計画人口　30,000人
- 総事業費　12,400億円
- 施行年度　1972～1992
- 計画戸数　8,000戸

(2) 都市機能ゾーンの内容

都市機能ゾーンは、島の中央を南北に走る六甲ライナー（新交通システム）とリバーモール（水路広場）を軸として業務・商業ゾーンを配し、その周辺に住宅・文化・教育・レクリエーションゾーンを配置している。

都市機能ゾーン 131haの内訳は、住宅38ha、業務・商業24ha、文化・教育・レクリエーション30ha、公園・緑地17ha、道路等22haとなっている。

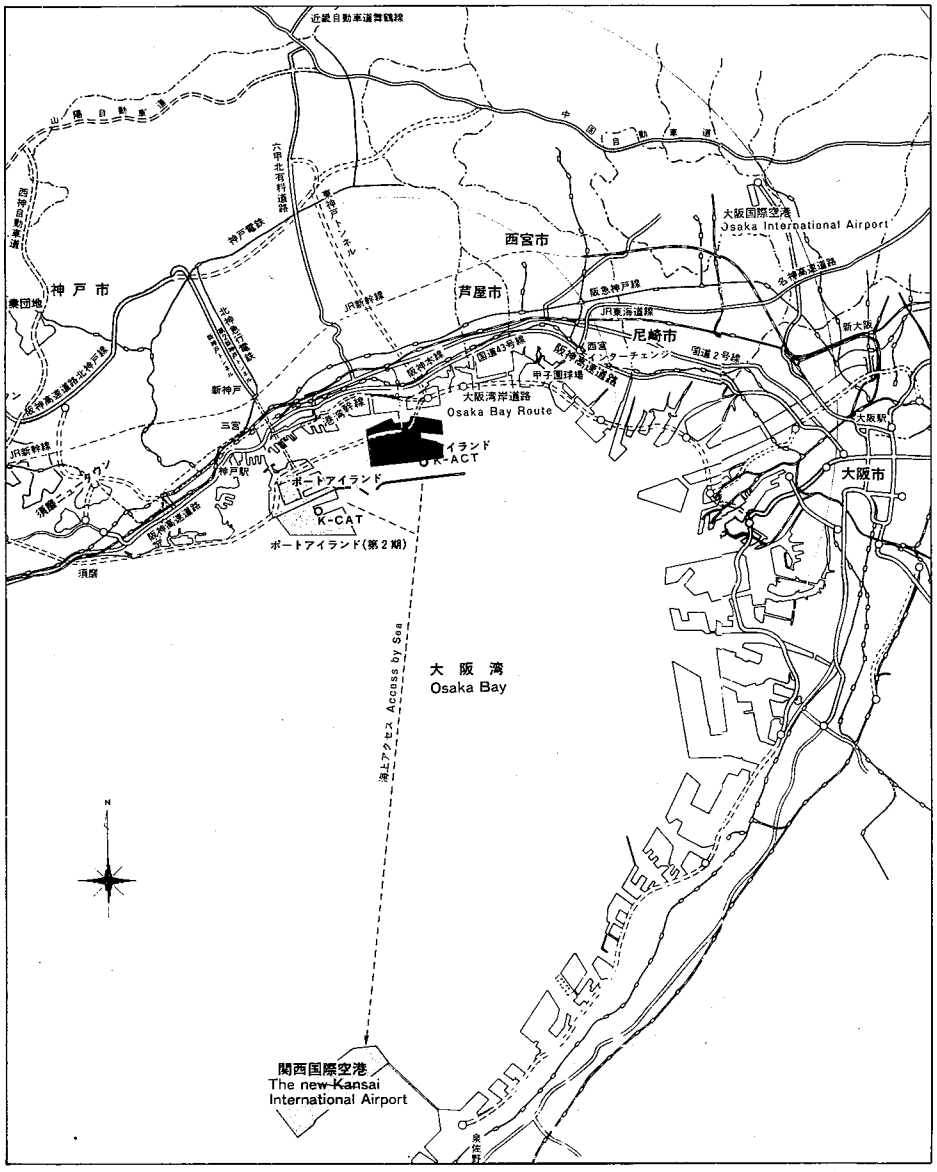
住宅ゾーンは、市街地に近く山と海が楽しめるという好条件を生かし、多様な住宅ニーズに対応するため戸建てから超高層まで種々の住宅を建設中である。

業務・商業ゾーンは、アパレルを中心にファッション産業・情報関連産業等の結集による新しい産業の確立を目指し、わが国初の国際ファッション常設展示場「神戸ファッションマート」を始め、ホテル、インテリジェントビル、グルメビル等が建設中である。

文化・教育レクリエーションゾーンでは、美術館や国際学校・大学、公園・緑地の他に水に親しめる入場無料の開放型テーマパークとして「ウォーターワンダーワールド」が今年７月に一部オープンしている。

また、新しい都市インフラ施設として、地域冷暖房システムや地域温水供給システム、中水道システム、ニューメディアサービスを導入している。

広域交通網図　Local Transportation Network



(3) 街づくり

(ｱ) 事業コンペによる街づくり

・第１次事業コンペ（住宅23ha、業務・商業８ha、計31ha）

＜事業主体＞

六甲アイランド開発㈱（住友信託銀行グループ）

＜住宅＞

4,000戸、15,000人計画－昭和63年３月入居開始

＜業務・商業＞

神戸ファッションマート、ホテル・グルメビル、総合病院等

・第２次事業コンペ（13.5ha）

＜事業主体＞

㈱西部百貨店（セゾングループ）

＜事業内容＞

テーマパーク「ウォーター・ワンダー・ワールド」建設

年間集客予定 ： 350万人

総 事 業 費 ： 780億円

(ｲ) 水と緑に親しめる街づくり

・シティヒル

全長５km、幅40～ 100m、高さ６～15mで、都市機能ゾーンの環境を守る緩衝緑地となり、テニスコート、トリムコース及び小磯記念美術館など多彩な施設を整備中である。

⑤リバーモール

都市機能ゾーンのシンボルであり、水辺の公共イベント空間として計画されている。

面積４ha（水面積0.9 ha）

水路延長１km。

街づくりの現場から――小林郁雄（まちづくり　株式会社コー・プラン代表）

(1)　景観形成のためのしくみとしかけ

六甲アイランド都市機能ゾーンにおける景観形成の全体調整は、学識経験者・各事業主体・行政関係者からなる「六甲アイランド街づくり協議会」に設置されている「景観形成部会」によって進められている。基本方向の検討、景観誘導の基準作成などから個々の建設事業主体による設計や施工に対する景観的な助言・指導・調整が役割である。そのガイドラインは「六甲アイランド都市機能ゾーン景観形成計画」（1986年12月、神戸市）としてまとめられている。

こうした方向づけに基づくものの、実質的な環境デザイン・建築デザインは各事業の主体的な取り組みにゆだねられており、六甲アイランドＣＩＴＹ（ＲＩＣ）と名付けられた北半分31haの街づくりでは、第１次事業コンペ時の提案を基本にしながら事業実施グループでデザインが検討されている。積水ハウスを中核とした住宅ゾーンの景観形成にコンサルタントとして協力してきた中で、街区レベルと建築レベルの環境デザインポリシーについて、その主要な点を二、三紹介する。

(2)　街なみのデザイン

【街角広場】　各街区は主要街路の交差点を特徴づけるように、街角広場の確保、街角建築の配置、街角彫刻の設置など街角を意識した整備を行っている。それぞれの街角広場は緑の多い緑地型のもの、連続する歩道と一体的に舗装された広場型のものなどがあるが、いずれにせよ六甲アイランド彫刻展の入賞作品が置かれ、鮮やかなポイントカラーの特徴ある街角建築物とあわせてデザインされている。これらの街角広場は都市計画的には地区計画の地区施設としてその利用が担保されている。ＲＩＣをぶらぶらして様々な街角を楽しんでみて下さい。

【二重街路樹】　各街路は公共施設整備主体である神戸市開発局によって、舗装・街路樹など街路ごとのテーマに併せて整備される。各街区では敷際の外周植栽の一環として、街路樹と同じ樹種の高木を配し、歩道の両側ともに緑をもつ二重街路樹をつくっている。

その他、住棟中庭広場（グリーンサーカスほか）、街区共通玄関（スーパーロビーほか）、緑陰駐車場などの環境デザインや生垣、ゲート、法面など敷際装置デザイン、街灯・サイン・看板など街具デザインコントロール、街角彫刻の設置などに力を入れている。

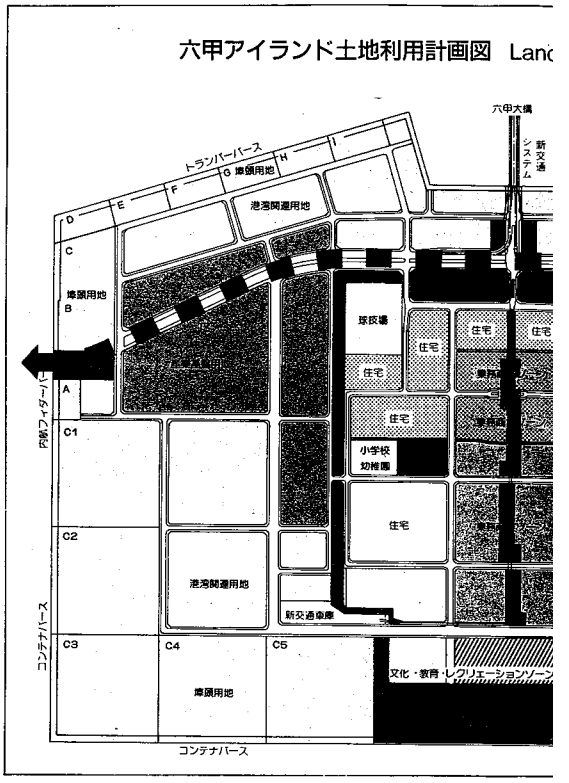
(3)　家なみのデザイン。

〔三層構成〕　高層建築のファサードデザインの原則は基部（ボトム）、頂部（トップ）と中間部からなる三層構成デザインとしており、内部の機能的にも最上階へのトップハウスや1階への街なみ施設の導入など三層構成を考える。基部は木・石やタイルなど耐久性と質の高い自然素材の材料を使うなど人間に近く手に触れる部分であることを前提にしたデザインとする。中間部は経済性を重視し素直なデザインを心がける。頂部は軒線を大切にすると共に、六甲山や山麓からの視線を意識してすべての建築物に勾配屋根をかける。住宅系は直線、業務商業系は曲線の屋根としている。

〔文節スリット〕　スーパーブロックとなっている街区への住棟配置は長大な壁面をつくりがちとなる。巨大壁面の連続は六甲山や大阪湾への視線を遮るだけでなく、道行く人々にとっても単調で圧迫された景観となる。板状の建築物はそのプロポーションに留意し、文節化をはかり、スリットの利用などヒューマンスケールに十分配慮したデザインとしている。

その他、建築主軸線の統一、積極的なポイントカラーの導入（早川良雄氏の指導）、本物素材の尊重（御影石の多用）などを基本に、各街区の建築設計間の相互交流（色彩、材料、軸線など）にも特に留意している。

シティヒル　City Hill



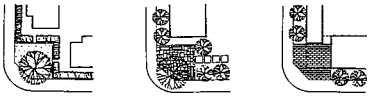
◆街角広場のデザインマニュアル

資料：「六甲アイランド都市機能ゾーン景観形成計画」1986. 12、神戸市

〔計画指針〕　主要な街路の交差点を、それぞれ特徴のある街角となるよう工夫を凝らし、街にめりはりをつけ、街を分かり易くする。

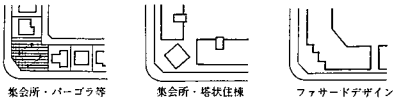
〔計画手法〕　コーナー部分の歩道、街角広場、街角建築物等を組み合わせ、それぞれ特徴のある街角として整備する。

〔計画事例〕　1．街角広場を確保する。



（A）緑地型　（B）広場型　（C）施設型（アルコーブ、ピロティ等）

2．街角建築物の配置、形態に工夫する。

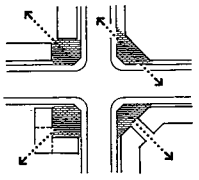


集会所・パーゴラ等　集会所・塔状住棟　ファサードデザイン

3．街角の修景を行う。・御影石等による舗装の統一
・シンボルツリーの植樹
・彫刻、モニュメントの設置
・ストリートファニチュアの効果的な配置

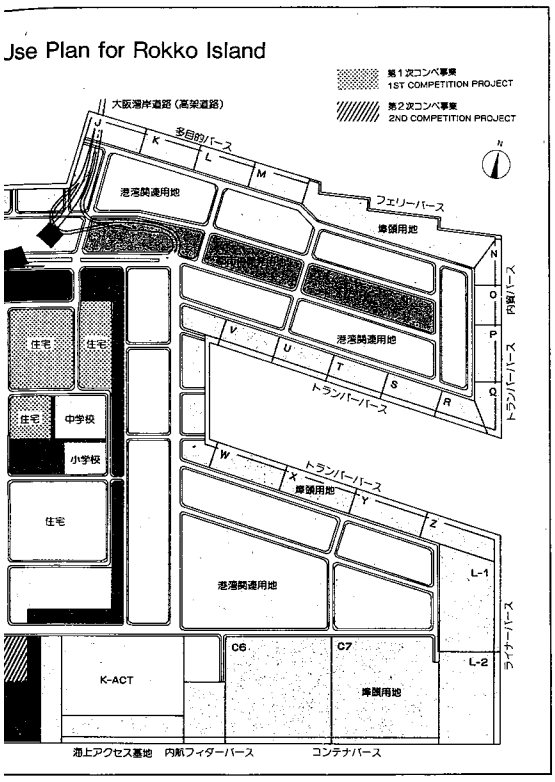
4．街角から敷地へのアプローチをとる。

5．街角の見通しを確保する。

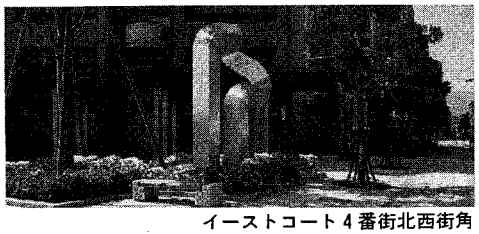


6．街角ごとに愛称をつける。

事業を受けてたつ立場から――積水ハウス株式会社 六甲開発事業部



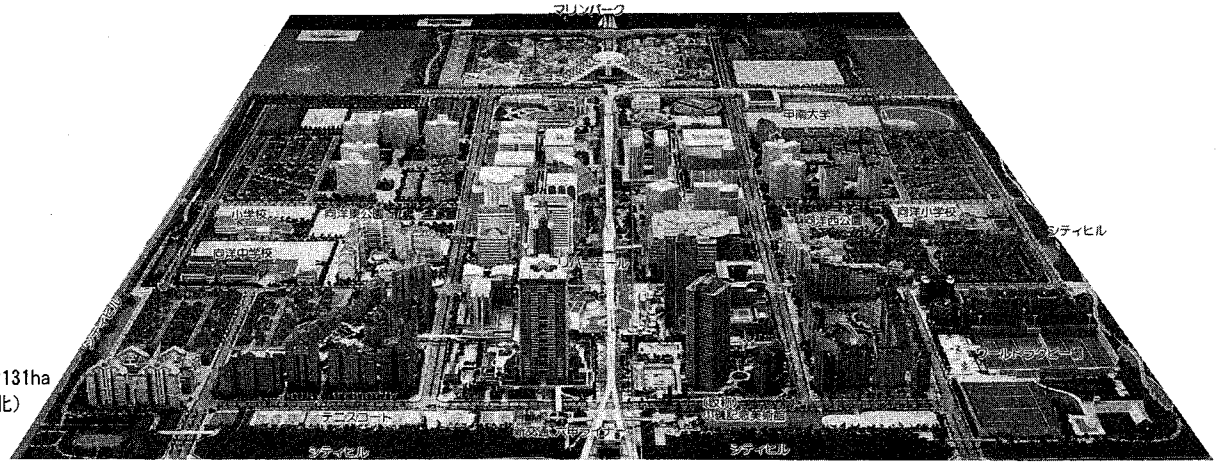
ウエストコート４番街南東街角


イーストコート４番街北西街角

六甲アイランドＣＩＴＹ（ＲＩＣ）は永年に渡って住宅を供給してきた私達が初めて取り組んだ都市開発です。今日、都市の開発において如何に人が快適に住むことができる環境をつくれるかが、大変重要な要素である。「街の主役は人であり、街づくりの基本は住まいづくりである。住む人たちの誇りが、その街の発展につながる。」これが私達の思想であり開発理念となりました。山の手六甲に表わされる阪神間の良好な住環境を都市づくりの原点にすえる「海の手・六甲」というキーワードとなったわけです。さらに、都市に住むことによって得られる文化的利便やアメニティをもたらす業務商業ゾーンの活性化と賑わいも大変大切なことですが、「住みたい街・行きたい街」というサブテーマを掲げ、あくまでも住環境との調和をはかりながら開発をすすめて来ました。都市の本質は種々のものが共存する多様性にあるが、魅力や快適性はその組合わせによります。その意味で、神戸市の整備による緑深いシティビルは周辺の産業施設と都市機能ゾーンを環境上区分する大きな効果を果たしている。又中央のリバーモールは海へ連らなる水のイメージをもつ都市の中心軸として、楽しい親水空間として親しまれている。又都市全体が建築のミュージアムとなる様に考えました。そこで色々な建築家に設計を依頼することとしました。私達事業者が開発の思想を説明することは当然ですが、他に設計の基本部分でデザインコードを作りその中で十分な設計を発揮して頂くことを考えたわけです。

ＲＩＣの都市スカイラインは全ての建物に屋根をつけることとし、建物においても意識的に高低差をつけた。それにより戸建住宅から中央の２棟の超高層住宅へなだらかに六甲の山なみにあわせたスカイラインを形成する。中央の２棟はロミオとジュリエットとしてシティゲートを構成し、ランドマークとなる。住宅ゾーンの建物は全て勾配屋根、業務商業ゾーンの建物はボールト或いはドームの構成とし、リズムと変化を意図している。街路空間の形成においても、ヒューマンスケールを実現すべく様々な配慮をしています。建物は基本的に街路を平行に配置される。住宅においては、自ずと囲み型となる。街路と建物の間にコミュニケーションを持たす為であるが、住宅においてはこの中庭が広場となり人工地盤下の駐車場となる。建物は基部から頂部への３層構成とし、スリットを入れて建物を分節。さらに外壁の色彩を少しずつ変える等の手法で、中庭へのビスタの貫入や人間的尺度の確保を配慮しました。又隣接建物相互のデザイン乗入れ等も楽しい街なみをつくっています。敷際の街路樹は歩道側の樹種と合わせ二重の街路樹で緑のトンネルをつくる。けやき通り、イチョウ並木が季節感に富んだ街路空間を形成しています。街角は都市アイデンティティ形成の大きな役割を担う。全ての街角に広場を設けシンボルツリーや街角を意識した建物があり彫刻が配されている。この彫刻を置く為、「海の手六甲に育つ子供達への贈りもの」と題し彫刻展を行った。守るべき環境をもたない人工島の開発に自然を持ち込む為せせらぎを各処に配し中央のリバーモールへつらなるイメージネットワークをつくり、街の記憶を形づくる。都市が美しく見える瞬間の中に夕景や夜景がある。景観照明に対する考え方は、シティゲートの屋根のライトアップ、街路樹のライトアップ、街路に対する照明方式の統一等を考えた。

最後に短期間に行う埋立地における開発に際しその限界を少しでも少なくする為に時間の蓄積を感じさせる太い樹や地域の固有性を感じさせ時間とともに存在感を深める御影石をグラウンドレベルで使うことにしました。



都市機能ゾーン131ha
手前が山の手(北)
にあたる

モノづくりの現場から――遠藤剛生(㈱遠藤剛生建築設計事務所)

神戸の街を模式図的に描くと、六甲山を背景に、そのふもとから海に向かってなだらかに降る坂の街である。一番上には、緑と住宅が綾をなしながら「山の手」の街を形成し、海と陸の境界線のあたりには、戦後の日本を支えた工場群がある。その海岸づたいに湾岸線の計画が進み、ベイエリア一帯が再び脚光を浴びようとしている。そんな街の間から海に向かって何本かの道があり、その先に、ポートアイランドや六甲アイランド等新しい街が生まれている。

かつてのニュータウンづくりと今日の新しい街づくりの根本的な違いは、まず街のイメージを示し、そのキーワードや結ばれた像を手がかりに、都市のエレメントが計画されることだろう。この六甲アイランドでは、対岸の歴史的な住宅地として評価の高い「山の手」のイメージに、現代の都市や時代の精神を加え、新しい神戸の街「海の手」、六甲アイランドをめざしたものと理解した。

本来建築は、それがレストランのインテリアデザインの計画であれ、住宅や、学校、ホテルであっても構わない。その用途の機能を満たすと同時に、その建物の中でふるまう人間の行為にふさわしい空間が用意され、その生活との関わりを通して豊かさを得ると同時に、知的興奮や、感動が得られるような「空間」を作ることが大切だと考えている。

同様に、今日「都市環境」という言葉が内在している概念とは、まさにこの建築における「空間」の持つ概念と同じだと考えている。

魅力的な「都市環境」づくりとは、ただ単に、建築や、道路や、緑や、オブジェが重層していればよいのではない。各々のエレメントの関係性の中に規範があり、ひとつの感性による統一がなければならないと考えている。

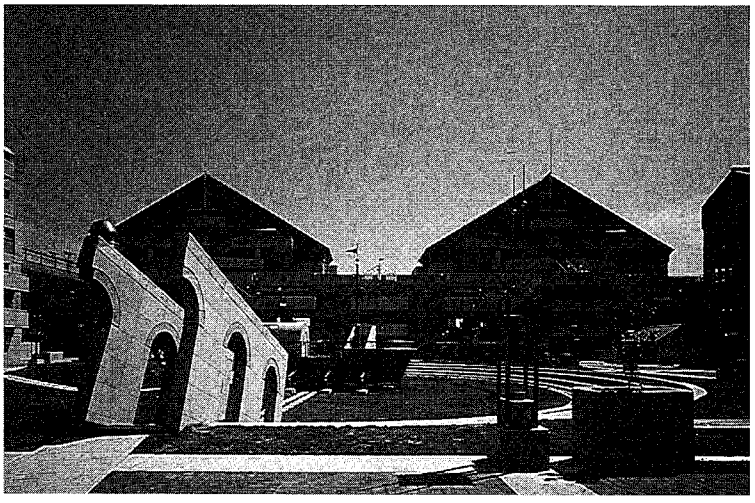
この六甲アイランドイーストコート五番街では、神戸の気風を捉え、少しノスタルジックな思いで対岸の風景を意識し、カナルを見降しながら生活をするであろう人々の姿を思い浮かべながら、計画は進められた。

全体のデザインコードは屋根の傾斜角度とカラーコントロール、街角の表情づくり等々であったが、それに合わせて、この集合住宅の単体のテーマは海の手の海とした。

対岸からシルエットとして見えるスカイラインを意識した屋根の形態、住棟の配置、建築の部分を構成するブリッジとその色と形、中庭の構成とそのアイテムに、燈台や船をあしらい、照明器具のデザインに、船やカモメをモチーフとした処理がなされている。

これらの要素を総合し、建築と、ランドスケープ、色調コントロール等を専門分化することなく、一つの構造の中に組み込んで、六甲アイランドの「都市環境」を構成する部分と考えて計画を行った。

【遠藤剛生】



東京大学公開講座
「現代の都市デザインの課題と展望」開催の案内

東京大学においては、今こそ都市デザインについて真剣に考えるべきときとの認識から、都市デザインを根本から問い直し、新たな総合化の道を探ろうと、標記の公開講座を開催することになりました。

開催に係わって、都市環境デザイン会議に後援の要請があり、代表幹事会においては、上記の趣旨が都市環境デザイン会議の活動目的に沿うものであるとの判断からこれを後援することと致しました。

会員皆さんの参加の便を考え、その概要を以下にお知らせ致します。

■日時：平成３年12月 6日（金） 10:00 〜17:00
■会場：東京大学工学部８号館 １階教授会室
■主催：東京大学総合研究奨励会
■協賛：東京大学工学部
■後援：都市環境デザイン会議、日本建築学会、日本造園学会、日本都市計画学会、土木学会、新日本建築家協会 等
■講座内容：
① 講義（以下の教授による講義５つ）
伊藤 滋教授（東京大学／都市工学、都市計画）
井出久登教授（東京大学／緑地学、景域保全）
篠原 修助教授（東京大学／土木工学、景観論）
豊口 協教授（東京造形大学／工学意匠）
香山壽夫教授（東京大学／建築学、建築意匠）
② パネルディスカッション
コーディネーター：大野秀敏助教授
（東京大学／建築学、建築意匠）
パネリスト：上記の５教授
■募集人員： 150人
■聴講料：15,000円（資料代を含む、会場にて納付）
■申込締切：平成３年11月30日

ロゴ決まる

時代のオリジナリティー
（なぜJUDIマークをこのように創ったか）

JAPAN URBAN DESIGN INSTITUTE

JUDI
JAPAN URBAN DESIGN INSTITUTE

JUDI
JAPAN URBAN DESIGN INSTITUTE

JUDI
JAPAN URBAN DESIGN INSTITUTE

JUDI
JAPAN URBAN DESIGN INSTITUTE

8月末、モントリオール美術館で“The 1920s:Age of the Metropolis”という見事な展覧会を見てきました。そこでは建築を始めとして、絵画、彫刻、工芸から、インダストリアルデザイン、グラフィックデザイン、写真に至る多様なジャンルの表現群が、1920年代という稀有の時代を再現していました。

かって花田清輝は「時代のオリジナリティーに比べれば、個人のオリジナリティーなど屁みたいなものだ」といいましたが、同展はまさにその言葉を、百聞は一見に如かずという感じで、証明していました。そこに並んだ６８８点の作品群は、ジャンルを越え、個人個人の個性を越えて、文字どおり「時代が創らせた作品」になっていたのです。私は、グラフィックデザイン領域の出身ですが、専門領域に留まっている気はもともとなく、自分の興味関心を、勝手に、建築から写真に至るデザインの全領域に広げていきましたが、何か、自分のそうした行き方が強い味方に出会ったような気がしました。

都市環境デザイン会議に参加したのも、1920年代をはるかに凌駕するいわば「超都市の時代」である現代の都市環境とデザインの相関に強い関心を持っていたからですが、今回、マーク＆ロゴ制作を担当させてもらうことになった時考えたのは、そういう私のような人間まで含んだ多様な個性を一つにつなぐ「時代性」と「都市環境デザインという領域」を合体させた表現、ということでした。

そういう大きなテーマを、私個人の個性で代表させるような脳天気なクリエイティブワークは出来ません。どうしよう？と考えた結果、花田清輝の言葉どおり「時代のオリジナリティー」の助けを借りることにした訳です。で、「今という時代」といえばどうしたってコンピューター＆エレクトロニクスでしょう。つまりＣＧ（コンピューター・グラフィックス）でということになりますが、ＣＧのあのノッペリしたテイストは嫌いなので、まあ「ＣＧの助けを借りＪＵＤＩというスペルで〈都市環境のデザイン〉というニュアンスを出そう」ということにし、いろいろやってみました。図版がそれらの例ですがその中で一番「時代性を表している」と思えるものを私が推し、幹事会に決めてもらったのです。

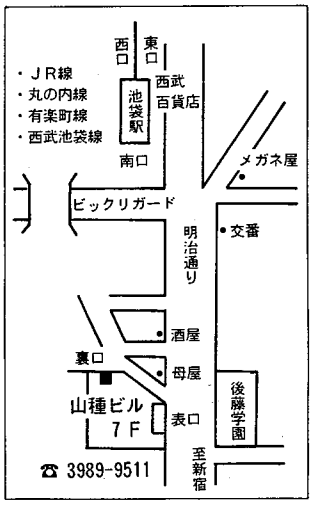
そのデザインをあえて言葉で表現すれば「生成する、活きた都市環境を形成するデザイン、を考えるＪＵＤＩ」ということになるでしょうか。

なお、このデザインは私のディレクションのもとに三宅顕司君が行ったものです。

【佐野　寛】

第3回例会

日時：1991年10月23日（水）．PM 6:30〜PM 9:00
場所：㈱都市環境研究所分室
　　文京区本郷3-32-6　ハイヴ本郷２階
話題：「都市環境デザインをとりまく状況」
　　第１回例会にひきつづき、話題に沿って自由な意見交換を行いたいと思います。
　　今日的な話題としてペーパー等準備していただければ歓迎します。
会費：会員 1,000円（非会員　¥2000.学生　¥1500.）
　　〔本来的姿ではないが、出席会員の同伴に限る。夕食は済ませておいて下さい。）
連絡先：㈱都市環境研究室分室（土田または一ノ瀬）
　　TEL:03-3814-1002. FAX:03-3818-1568
◆申込は先着３０名まで.
◆地図はNEWS１号参照



地図。当日は裏口からお入り下さい。

第4回例会

日時：1991年11月21日（木）．PM 7:00から
場所：㈱ＧＫ設計　会議室
　　豊島区南池袋1-11-22　山種ﾋﾞﾙ７Ｆ
話題：「開発行為に対するデザイナーの関わりについて」
　　大規模開発及び博覧会などに対して、各専門領域のデザイナーは、どのような関わり方をしていく必要があるのか等。
会費：第３回と同様
ｺﾒﾝﾃｲﾀｰ：曽根幸一、南條道昌、林泰義、福沢健次（敬称略）
連絡先：㈱ＧＫ設計　（西沢または藤田）
　　ＦＡＸ：03-3989-0533

代表幹事会から

都市環境デザイン会議が発足してから早くも4ケ月が過ぎようとしています。設立当初であることもあり、会の活動を軌道に乗せる上で重要なことから雑多なことまで、この間、代表幹事会は様々な事項について相談してきました。この中から主要な事項について報告致します。

● ブロック幹事の決定

前号でも若干お知らせしましたように、本会の規約に基づき全国各ブロックごとの会員の情報交換や例会の開催を活発化し、また代表幹事会との連絡をスムーズに進める等のために、代表幹事会ではブロックごとの幹事の選任を進めて参りましたが、過日図に示す方々が引き受けて下さることになりました。今後はこれらの方々を中心に各ブロックごとの活動が活発に展開されることが期待されます。

● ブロック幹事との連携等

ブロック幹事の皆さんと代表幹事会との連携をスムーズに進めるために、ブロック幹事全員の会合を近く開くことを予定しております。

また、代表幹事会の活動の状況をブロック幹事に伝えるために、代表幹事会の議事録や事務局で発行している週間報告書を送ることとしました。

● 新規入会希望者への対応

本会の発足後、会の存在を知って本会への入会希望者が相当数ありました。規約では推薦人が2名必要となっておりますが、名簿が作成中であるために入会希望者が推薦人を見出すことができないことを考慮して、入会申込のあった方については申込書に基づいて代表幹事会で入会の是非を判断することと致しました。新たな入会申込者も含めて、現在の会員数などについては本号の事務局だより欄に示されています。

● 代表幹事会の定例化

代表幹事会はこれまでほぼ毎月1回不定期に開いてきましたが、10月からは毎週第一土曜日の午後開くことに定例化しました。代表幹事会で相談する必要がある事項、希望等がありましたら、上記のスケジュールを考慮して事務局までご連絡下さい。

【加藤　源】

事業委員会から

事業委員会における、1991年度事業計画については現在検討中ですが、現在その一環として以下の事業を実施しております。

『都市環境デザインの実務者の
質的向上をはかるためのセミナー』
（財団法人パブリックデザインセンター主催）
［全5回］
への講師派遣

それぞれ右記のようなテーマで本会会員の中から右記の方に講師をお願いし、第1回、第2回目を既に実施しております。なお、講師謝金の一部を本会の事業収入とすることとしております。

【佐々木政雄】

第1回 7月23日	「道路・街路におけるデザインの役割について」 佐々木政雄（㈱アトリエ74都市計画研究所）
第2回 9月5日	「街づくりにおけるイベント等のソフトの役割について」 南條道昌（㈱都市設計計画研究所）
第3回 10月15日	「街づくりにおけるモニュメント、彫刻等のデザインの役割について」 関根伸夫（彫刻家、㈱環境美術研究所）
第4回 11月 7日	「建築物の高さ、形態が都市空間に及ぼすデザインの役割について」 講師未定
第5回 12月	「公園、広場、水場におけるデザインの役割について」 大塚守康（㈱ヘッズ大阪本社）

事務局だより

夏の間、長めのお休みを頂いておりました事務局ですが、9月9日以降業務を再開しています。発足会以来、会員数も順調に増え続け、事務局に途切れなく送られてくる入会申込書を受け取るのは、楽しみのひとつになっています。

● 最新会員数

当初の6月末日までの申込締切を8月末日まで延期した結果、9月9日現在の会員数は、214名に上っています。発足以前から入会を希望していた方の他に、雑誌等で本会の発足を知り、その後入会された方が含まれています。

● 名簿づくり

都市環境デザイン会議、初年度の名簿作成の準備を進めています。本会への入会は随時受付ていますが、今回の名簿に記載されるのは8月末日までに手続きを終了された方までとさせて頂きますので、ご了承下さい。尚、名簿の発行は10月末を予定しています。

● 事務局業務時間

当初は週5日業務を行っていましたが、入会申込みが一段落したこともあって、今後は以下のような業務時間に変更させて頂きます。常駐事務局員不在のためにご迷惑をおかけすることもあるかと思いますが、時間外は留守番電話、FAXを御利用下さい。

事務局業務時間
曜日：　月曜日　＋　金曜日
時間：　10:00am ～6:00pm

【片岡真実】